



以  
己  
下  
名  
水  
地

下

~ 2
1463
2



門 1463  
卷 2

田中 福助 蔵

年丙寅三月江戸大火ニヨリテ其家モ燬<sup>キ</sup>ヲ得脱  
 レス然レ氏菴ハ恙十カリキコノ後假造作ノ徒  
 ニシテ門ハ板塀ヲ以テシ屋上ニハ牡蛎<sup>カキ</sup>壳<sup>カ</sup>ヲ敷  
 ケリ因テ所親ニ語テ云吾ニ子ナク且ツ妻ハ尚  
 ワカ、リ加<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>近日高買如意ナラス然レ氏續本  
 国字出像ノ小説ヲ讀奉ト云フ流行スルヲモテ  
 文ヲ旨トスルモノナレハナリ  
 潤筆ハ初メニ倍<sup>マシ</sup>タリコハ家ノ美惡ニヨルニア  
 ラス家ヲ造リ更<sup>カ</sup>レハ財ヲ失フニ急ニシテ利ヲ  
 得ルニ緩<sup>ユル</sup>シカクテ在ンノミトイヘリ其意財ヲ  
 遺<sup>コ</sup>サント思フニアリ其自画賛ノ扇及短冊皆價

ヲ定メテコレヲ賣ルニ遠近買求ルモノ多シ讀  
書丸モ亦日々ニ出ツ但其烟管烟包ハ初ノ如ク  
賣レサルノミ其性古書画古器物ヲ愛スルヲモ  
テ二百年來ノ風俗書画古器ホノウヘヲ考究シ  
ト欲リシ勉メテ和書雜籍ヲ讀テ抄録年ヲ累シ  
カハ其學問頗進メリヨリテ古書画古器ノ鑒定  
ヲ請フモノモアリケリ文化元年ノ冬近世奇迹  
考五卷ヲ著セシニ英一蝶カ傳ノコトニヨリテ  
英一蜂トイフ者障リケレハ板元大和田安兵衛  
ニ告テ其板ヲ毀テ又此レ争ヒヲ好マサル謹慎

ノ所<sup>ユ</sup>以<sup>ユ</sup>ナルヘシコレヨリ又骨董集ヲ昔サント  
欲シテ苦心十餘年ニ及ヘリ其間菴書家ニ因ミ  
テ奇書ヲ借抄シ或ヒハ博識ニ問ヒ或ハ故老ニ  
訊ヒ聞ケハ必識シ見レハ必録ス更ラニ親疎ヲ  
擇ハス云云ノ書ハ云云ノ家ニ藏メタリト聞ク  
コトアレハコレヲ訪フテ其書ヲ閲シ云云ノ事  
ハ云云ノ人ヨク知レリト告ル者アレハコレヲ  
訪テ其說ヲ聞リ凡他ノ菴書ヲ借ルニ只有用ノ  
処ノミ一二卷ニ過キス抄録スレハ速ニ返セリ  
依<sup>テ</sup>之<sup>ニ</sup>全書ヲ見ルニ非レ氏所引ノ書多カリ其用

心奔走一朝一夕ノ事ニアラス曾テオモヘラク  
漢学ハ吾企及フ所ニアラス國学モ亦近来名家  
多ケレハ及フヘカラス只二百年來ノ風俗ヲ考  
究メタルモノナシ吾コノ好事ヲモテスル片ハ  
儒者モ得難ゼズ國学者モ感服スヘシトテ專ラ  
其考ニ苦心セリ此アヒダ京傳ノ養女鶴没ス年  
十六ナリキ十三四歳ノコロヨリ尾州ノ御守殿  
ハ部屋子ニ遣セシカ勞症ニヨリテ  
里ニ下リ早逝セリ竟養母ハ実ハ姊ナリニ親ノ哀悼大カ  
タナラスコノ後京山ノ長サヲ  
呼ムカヘテ養ヒニキ百合ノ叔母モ亦  
ミマカリヌ又百合ニ外叔母一人アリ明ヲ失ヒ

テ剃髮シタリ且其子無頼ニシテ住処不定也京  
傳其瞽尼ヲ呼トリテ扶持シタリコノ頃ノ事ナ  
ルヘシ京傳百五十金ヲ以テ篋頭ノ家扶ヲ購ヒ  
得タリ毎月ニ利ヲ得ルコト三方金ナリト云フ  
此レ其妻ニ遺サシカ為ナリ一日馬琴ニ謂テ云  
吾ニ子ナケレハ才京山ニ數子アレハ父祖ノ血  
脈絶ルニアラスカ、レハ後口ヤスキニ似タリ  
然レ氏百合カ為ニ後ノ謀ヲナサスハアルヘカ  
ラス因テ云云ノ家扶ヲ購得タリヨニ財アレハ  
生涯安カルヘシ吾カ身後渠モシ零落シ困窮セ

ハ世人必イハシ渠ハ京傳カ妻ナリシモノナリ  
ト是吾カ身後ノ恥ノミニ非ス渠家莫ニ功アリ  
其生涯ノ為ニ漢ラスハ渠亦孰カ憑ラシ君其  
レ如何トカスル馬琴應ヘス後又コノ事ヲ云フ  
コト再三ナリ馬琴コレニ對テ云吾カ思フ所ハ  
異ナリ顔氏家訓ニ不云乎遺子萬金不如薄藝從  
身君子ハ其子ニスラ財ヲ遺サント欲セス况其  
妻ニ於テヲヤ君苦心シテ千金ヲ遺スモ恐ラク  
身後ノ勢ヒ今ノ謀ル所ト同シカルヘカウサラ  
ニ軟是モ亦知ルヘカラス孔子曰其人存則其政

存其人亡則其政亡財有テ身後ニ家督定ラサル  
時ハ所親其財ニ依テ較計シ相争フテ竟ニ其家  
ヲ覆ス者今古ニ少カラス君モシ賢妻ノ為ニ其  
老後ヲ憐マハ君ヨク保養シテ長寿ナラムノミ  
君衰邁ノ齡ニ至ラハ賢妻モ亦老遊タルヘシ其  
間親族ノ中ヨリ篤実ノ子ヲ養ハ、後ノ患ヒ十  
カラシ軟且死生命アリ老弱不定ナリ賢妻モシ  
君ニ先タチテ下世セハ遺ス所ノ財抑誰カ有ゾ  
ヤ愚以謂財ヲ遺スハ後ノ患ヒヲ遺スニ庶シ吾  
ハ男女ノ子アレモ財ヲ遺スノ餘カナシマシテ

妻ノ為ニ後ヲ思フニ暇アラシヤ京傳黙然タリ  
後ニ或<sup>ト</sup>ニ語テ云余馬琴ト交ルコト二十餘年近  
來渠カ気韻マス卓<sup>カ</sup>シ渠モシ返ルコトヲ忘レ  
十ハ必世人ニ捨ラレム夫レ高山ニ登リテ其ノ  
山麓<sup>フモト</sup>ヲ觀レハ杳渺トシテ能ク視カタシ山麓ニ  
在テ其巔<sup>イタキ</sup>ヲ瞻<sup>ミ</sup>レハ瞭然トシテ視エサルコト十  
シ渠其巔ニ在リトイフ何ソヲリノ下リテ山  
麓ニ遊ハサル或<sup>ト</sup>コレヲ馬琴ニ告ク馬琴笑テ應  
ヘス或<sup>ト</sup>強テ説ヲ問フ對テ曰人各志アリ彼カ是  
モ未タ是トスヘカラス我カ非モ未非トスヘカ

ラス匹夫モ奪フヘカラサル者ハ其志ノミ是足  
下ノ知ル所ニアラス或<sup>ト</sup>喜ハスシテ退<sup>カ</sup>リ又後又  
京傳馬琴ニ謂テ曰曩<sup>サキ</sup>ニ吾レ有事ヨリ謹慎ヲ宗  
トス是ヲ以微膽小量ノ濊<sup>シ</sup>リアルヘシ然レトモ  
於<sup>レ</sup>吾甚安シ前車ノ戒ヲ忘レタルモノ作者画工  
皆其咎ニ遇サルハ十<sup>シ</sup>寛政十年十二月下旬式  
卷トイフ全三卷ノ草冊子ヲ著シタリコハ其コ  
口一番組ニ番組ノ火消人足カ於<sup>レ</sup>場所<sup>ニ</sup>聞諍ノ事  
アリ三馬即チコトヲ作<sup>レ</sup>ル也十一<sup>年</sup>正月  
五日ヨ組ノ爲人足ハコノ事ヲ怒<sup>レ</sup>テ極元<sup>年</sup>正月  
西宮新六カ店及三馬カ宅ヲ毀シタルコト甚  
シ因テ御檢使ヲ奉<sup>レ</sup>願公訴ニ及ヒシカハ双方  
御吟味中爲人足ノ頭<sup>タ</sup>チタルモ共ハ入室  
仰付<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>程<sup>ア</sup>リテ板元新六ハ過料作者三馬事

本助ハ手鎖五十日ニシテ御免アリ入牢人カ  
 モ赦ヲ蒙リ奉リ又三馬ハ板木師菊池茂兵衛カ  
 子ナリ幼稚ノ時ヨリ書林西宮弥兵衛カ家ニ年  
 季奉公シ寛政中山下町十ル書林万屋太次右工  
 門カ塔養子トナリシカ其妻ハ資ケニヨリ且故有  
 テ養家ヲ離別シ更ニ或ヒトノ資ケニヨリ本  
 町一丁目ニ賣茶店ヲ開キシカ今ハ二丁目ニ移  
 リ又〇文化二年乙丑ノ春ヨリ繪本太閤記ノ人  
 物ヲ錦繪ニアラハシテ是ニ雜ルニ遊女ヲ以シ  
 或ハ草冊子ニ作リ設ケシカハ画師喜多川歌麿  
 ハ御吟味中入牢其他ノ画工歌川豊國事熊右工  
 門勝川春英喜多川月勝勝川春亭草冊子作者一  
 九事等枚輩ハ手鎖五十日ニシテ御免アリ  
 リ歌麿モ出牢セシカコハ其明年没シタリ至秋  
 一件落着ノ後大坂ナル繪本太閤記モ絶板  
 付ラレタリ〇十返舎一九ハ重田氏駿河ノ人ナ  
 リ自云フ明和ニ乙酉ノ年ニ生レタリ弱年大坂  
 ニ転キ四五五年ヲ歴テ江戸葛屋重三郎カ食客タ  
 リ後ニ長谷川所ナル某生カ後家ニ入夫シタリ  
 シカ離別シテ再ヒ妻ヲ娶リ今ハ通油町ナル地

本問屋ノ参會所 獨足下ノニ無事ナリコハ年来  
 謹慎ノ故ナルヘケレト幸甚シト謂フヘシ吾モ  
 シ著述ニヨリテ御咎ヲ蒙リ奉ルコトアウハ再  
 犯ノ罪重カルヘシ是ヲ以夜ニ思ヒ晨ニ省ミ著  
 述ノウヘニ禁忌ヲ犯スコトナシ然レ氏或ハ人  
 ニ浼洩セラレ或ハ連累セラレサラテモ不慮ノ  
 殃危ニアフコトナシトスヘカラス吾是ホノ禍  
 ヲ脱レン為ニ近キコロヨリ湯嶋ナル菅廟ヲ信  
 シ奉リ月ノ二十五日毎ニ必参詣ス是一ツニハ  
 無事ヲ禱り一ツニハ歩行道遙シ一ツニハ下谷

浅草ナル友人ヲ訪フテ以問ヲ遣ムト欲ス迺チ  
一事ヲ以三用ヲ兼タリト云フ馬琴聞テ善ト称  
セリ其明年ニ至テ馬琴一日京傳ヲ訪フニ其妻  
ノ云良人ハ湯嶋ナル天満宮ニ詣ルトテ出テ未  
還トイフ馬琴聞テ領テ云現今日ハ二十五日十  
レハ其事アラム聖廟月参ノコトハ豫テ聞タル  
カ吾コレヲ忘レタリ因テ少選雜談ス百合ノ云  
良人嘗妾ニ謂テ云吾カ舊友ノ中馬琴子ハ文墨  
ニ才アルノミナラス世事時務ノウヘニ智慮アリ  
吾モシ萬一ノ事アリテ汝決断レカタクハ彼

人ニ問ヘトイヒキトイフ馬琴應ヘス他更ニ紛  
ラレテ竟ニ退リ又文化六年己巳ノ十二月馬琴  
夢想兵衛蝴蝶物語トイフ冊子ヲ著シタリ其編  
中ニ忠臣蔵テフ浄瑠璃本ナル早野勘平カ妻輕  
カ事ニ托シテ遊女ト妻ヲ等ク思フ者ヲ譏レリ  
京傳見テコレヲ怒ル七年ノ春正月京山ト共ニ  
馬琴ヲ訪フテ年始ノ慶賀ヲ告ケ語次此事ニ及  
ブ京傳ノ云遊女ニモ賢アリ才アリ且人ノ妻ト  
ナリテ貞実ナルモノ多シ大允身ヲ花街ニ售ル  
モノハ或ハ親ノ為ニシ或ハ兄才ノ為ニセサル



ハ稀也。是レ孝是レ材ニシテ身ヲ万客ニ任スル  
モノ。豈憐マサランヤ。吾レ経学ニ暗シ。足下屢聖  
人ノ言ヲ称述スモシ。聖人ヲシテ今コ、ニ在ラ  
シメテ此等ノ是非ヲ問バ。聖人其レ何トカイハ  
ン。足下聖人ニ代リテ吾カ為ニコレヲ云ヘ。馬琴  
對テ云。足下ノ言究メテ是ナリ。吾レ疎忽ニシテ  
言ヲ慎マス。不覺シテ大方ノ怒リニ遇ヘリ。駟モ  
亦何ソ及ン。然レ凡世間ニ遊女ヲ妻トスルモノ  
千万人イマダ吾カ書ヲモテ恨ミ憤ルモノアル  
コトヲ聞カス。且ツ聖賢ノ教ハ大事ニ在リテ小

事ニ及ボシ。男子ニ在リテ女子ニアラス。故ニ孔  
子ノ曰。女子小人。為難養也。遊女。賢才ナリ。凡貞実  
ナリトモ。聖人豈其是非ヲ論センヤ。漢水ノ遊女  
ハ。今ノ賣色ニアラネ。凡猶且ツ詩ニ禁之ヲタリ。足  
下吾書ヲ見ルコト再三セハ。其怒オノツカラ。解  
ケレ。京傳マス。怒テ猶争ントス。京山倚ラヨリ  
禁之ヲ淡他事ニ及ヘリ。彼ノ兄才去テ。後馬琴。後  
悔シテ。以謂昔俳諧師芭蕉ハ。其門人杜國カ。瞽者  
ナルヲ以生涯耳聾ノ句ヲ作ラ。ストコソ云フナル

ニ吾慮ノ足ラサル彼俳諧師ニタモ及サルコト  
遠シ人ノ嫌忌測リカメシ慎スハアルヘカラス  
ト云テ其子ニ告テ以自警ム然レモ京傳再ヒコ  
ノ事ヲイハス馬琴モ亦众意セスレテ交リ初ノ  
如シ只其志ス所各同シカウサルヲ以テ來會年  
中ニ兩三度ニ過サルノミ骨董集ニ引用ノ為馬  
琴カ菴書ヲ借ルコト屢ナルモ迭ニ書状ノ往來  
ノミニソアリケル文化十一年京傳其著ス所ノ  
骨董集上編中上ニ冊書肆發行シ十二年乙亥十二  
月上編下之嗣梓刊布セリ享和中ヨリ是ノ著ニ

苦心スルコト十餘年コ、ニ至テ先ツ其上編ア  
ラハレタリ都下ノ紙未貴キニ至ラネモ世ノ好  
事ノ者コレヲ珍愛スルコト少カラス又其中編  
ヲ著サント欲シテ諸書ヲ借抄シテ已マス然ル  
ニ此コロ歩行スレハ胸痛スト云テ閑居スルノ  
ミ明年ノ夏ニ至テ少シク愈タリ是ヨリヨリ  
逍遙セン為ニ友人ヲ訪ヘリ十三年丙子ノ秋京  
山其母屋オモヤノ向ヒニ別ニ書齋ヲ造レリ此新書齋  
ヲ開クトテ七日ノ夕舍兄京傳ヲ請待シ真顔靜  
廬ヲ相容トスコノ日京傳ハ明春出板ノ草冊子

ヲ割シテ初更ニ及ヘリ京山カ使シバ、来ルヲ  
以遂ニ筆ヲ投テ其家ニ趣キツ間僅ニ二町許十  
ルヘシ真顔静廬等ト清談シ且舊時ヲ語テ酒食  
常ノ如ク快ク喫シ三更ニ及テ辞シテ家ニ歸ラ  
ントス真顔ハ脚痛アルヲモテ先夕チテ歸去リ  
又因テ京傳ハ静廬ト共ニ京山カ書翰ヲ去テ一  
町ハカリニシテ俄頃ニ曾痛スト云テ進マズ静  
廬驚テ其木履ヲ脱シメヌガ扶掖テ其家ニ送り深更  
ナルヲモテ辞シテ去ヌノ静廬カ家ハ芝新橋ノ西  
屋根屋三左エ門真顔カ百合驚憂ヒテ介抱シ急ニ  
家ハ上ニイヘリ

小廝ヲ走ラセテ京山ニ告ク京山走り来テ百合  
ト共ニ藥ヲ勸メ自ラ鄰町ナル医ヲ迎ヘテ診セ  
シム医ノ云是乾脚氣ナリ救フヘカラス強テ療  
治ヲ乞フニ及テ二帖ヲ调剂シ灸治ヲス、メテ  
去リツ鍼灸ノ效アルニ似テ廁ニ登ント云フ即  
チ扶ケテ趣シメ便快ク通シタリト聞テ又扶ケ  
テ臥房ニ入レテ臥シメシニ呼吸急ニシテ言フ  
コトヲ得ス四更ノ比コホヒ及竟ニ没シ又時ニ年五十  
六コレ是脱丸ノ症ハ便ノ通スルヲ忌ム明日未ノ時  
兩國橋辺回向院無縁寺ニ送葬ス法名智誉京傳

信士コノ日柩ヲ送ルモノ蜀山人狂歌堂真顔静  
廬針金烏亭琴馬曲亭馬琴及北尾紅翠齋歌川豊  
國勝川春亭歌川豊清歌川國貞ハ凡吊スル者百  
餘人也 記者ノ云京傳天稟ノ狂才アリ初ハ  
草冊子洒落本ヲ以名ヲ知ラレタリ毎編用ル所  
ノ巴山人ノ印章ハ其父母ト共ニ深川木場ナル  
典物舗ニ在リシトキ質物ノ中ヨリ出タリ其質  
流ル、ニ及テ父コレヲ京傳ニ与フ于時年八九  
歳コレヲ愛玩スルコト天毬撫玉ノ如シ或ルト  
キハコレニ緒ヲ附ケテ紙イカ、ホリ鷲ヲ取ルノ具トシ或

トキハ是ヲ腰ニ佩テ能ク失フコトナシ天明ノ  
末ニ始テ草冊子ヲ著スニ及テコノ印ヲ用フ遂  
ニ世俗ノ目識メシルシトナルニヨリテ多ク他印ヲ用ヒ  
又世俗コレヲ京傳カ牡丹餅ノ印トイフ其形ノ  
相似タレハナリ其店ノ暖簾ニモ此印ヲ添タ  
リコレ銅印ニシテ唐物ニ似タリ其生涯巴山人  
ノ号ヲ用ヒストイヘ氏印ハコノ人ニ依テ見アラハ  
レコノ人ハ其印ヲモテ名ヲナセリ是其後身軟  
奇ト謂ツヘシ初ハ書ヲ讀ムコト博ウサリシカ  
ト文ヲ綴ルニ必和漢ノ故事ヲ引用セサルコト  
ナシ是ヲ以世俗博學ナラムトオモヘリ亦是才

子ノ所<sup>ワザ</sup>為ト謂フヘシ齡四十ニ及テ頼リニ好事  
ニ走り其考究ノ為ニ和書雜藉ヲ讀ムマニノ、学  
問ヤウヤク進テ才餘リアリ只經学ニハ甚疎シ  
コノ故ニ四書ノ語句ノ類ハ半句モ記誦スルコ  
トナシ識者以遺憾トス稟性貧弱ニシテ一臂ノ  
重キニ堪ヘス然レモ多病ニアラス五十歳ニ及  
フマテ多クニモヲ不見眼明<sup>カ</sup>ニメ齒牙一抜ダモ  
脱<sup>オトサ</sup>サリキ性酒ヲ嗜サレモ美酒ヲ貯テ毎夕一盞  
ヲ傾ケタリ此レ其氣血ヲ巡ラサン為也然レモ  
炎治ヲ嫌ヒテ且ツ餌菜ヲ服セズ只食ト溜トヲ

過度セサルノミ雷ヲ懼ル、ノ故ニ夏日ハ遠ク  
出ス又舟ヲ懼レテ水行セス皆虛症ノ為也齡半  
百ニシテ其耳些シ聾ナリ是虛弱ニシテ多年思  
慮ヲ費セシ蔽レナラム著述ハ每編稿ヲ易テ輕  
々シク書肆ニ授ケス且遲筆ナルヲモテ稿ヲ脱<sup>ズ</sup>  
コト速ナラス是故ニ草冊子ノ外必年ヲ累サレ  
ハ成ラズ其孝友ニ於テ聞ルコト無シトイヘモ  
二親ヲ安ラシムルモノ、如シニ親モ亦其意ニ  
任セテ制スルコトナカリシカハ一家和順シテ  
兄弟所親口舌アルコトナシ其謹慎ノ人ニ過キ

タル百事千慮只官吏ヲ懼ル、コト虎ノ如シ其  
友ト交ルニ争気ナシトイヘ氏聊嫌忌アリ初メ  
万象亭ト交リ浅カラサリシニ寛政ノハジメ彼  
人田舎芝居トイフ一小冊ヲ著シテ其自序ニ今  
ノ洒落ハ畢丸<sup>キンタマ</sup>ヲ出シテ笑スルカ如シトイヘリ  
京傳見テ己レヲ激レリトシテ恨憤リ竟ニ其事  
ヲ言ハスシテ又万象亭ト交ラス一旦馬琴ヲ恨  
タリシモ亦コレニ似タリ一切ノ著編ハ秘シテ  
戯作ヲスル者ニ語ラス此レ其趣向ヲ奪レン歎  
ト思ヘハナラム其ノ才滑稽ト繪組ニ妙ニシテ

趣向ノ筋ニタクミナラヌ是故ニ唐山ノ小説及  
説経ノ趣向ヲ撮合シテ作りナスコト多シ然レ  
氏能ク撥リナスヲモテ其出ル所ヲ顕サスコ、  
ヲ以<sup>ミルモ</sup>看官コレヲ知ルコト稀ナリ能辯ニハアラ  
カレ氏其趣向ノ大略ヲ先ツ其板元ノ書肆ニ語  
ルニ能其趣ヲ尽スコト上手ノ落語<sup>オトシバシ</sup>ヲスルカ如  
シ書肆ホトノ感心シテ階<sup>アキ</sup>マス其書ヲ刺スルニ  
及テ作者ノ意ニ任セサルコトナシ是一術ナル  
ヘシ其性浮薄ナラサレ氏老後モ興ニ乗スレハ  
茶番狂言ナトシテ人ヲ笑スルコトアリケリ戯

作者ハ風来山人及喜三二春町等ヨリ世ニ行レ  
タレトモ書肆ヨリ著述ノ潤筆ヲ得ルコトハ十  
カリキ早春其作者ヘハ板元ノ書肆ヨリ錦繪草  
冊子ナント多ク贈リ又當リ作アリテ<sup>アタマ</sup>夥賣レタ  
ルキハ其板元一夕作者ヲ遊里ナトヘ請待シテ  
麥少ノ饗應スルノミナリキ寛政中京傳馬琴カ  
兩作ノ草冊子大<sup>イッ</sup>行ルニ及テ書肆耕書堂仙鶴  
堂相謀リ始テ兩作ノ潤筆ヲ定メ件ノ兩書肆ノ  
外他ノ板元ノ為ニ作スルコトナカラシム京傳  
馬琴コレヲ許スコト六七<sup>シ</sup>年<sup>シ</sup>後マス、行レテ



他ノ書肆ハ障リヲイフモノ多カリシカハ耕書  
仙鶴ノ二書肆モコレヲ拒<sup>コト</sup>ムコトヲ得ス廣ク著  
編ヲ与ヘ刻サスルコトニナリタリ又其濡筆モ  
漸々ニ登リニキ皆是書肆ハカ定ル所ニ從フノ  
ミ後ニイテ来ツル戲作ハ例ヲ推シテ濡筆ヲ得  
ルモアレトヨク京傳馬琴カ濡筆ニ及フモノア  
ルコトナシ是ヲ以世ノ文場ニ遊フモノ或ハ猜<sup>ソネ</sup>  
ミ或ハ羨ミ彼兩作者ヲ嘲ルモノ多カリ凡戲墨  
ヲ以名ヲ知ラルモノ少カラス然レモ戲作ニ  
ヨリテ學ノ進ミシモノハアラス只京傳ノミ凡

娼妓ニ惑溺シテ産ヲ破ル者多シ然レモ娼妓ニ

惑溺シテ貨ヲ殫スモノハナシ只京傳ノミ今コ

ノ西事ヲ以其人トナリヲ思ヘハ亦是一個ノ畸

人也傳テ以話柄トスヘキ歟

京傳ノ著書尤多シ其草冊子及洒落本ノゴトキ

ハ今録スルニ勝ス其他左ノ如シ

孔子一代記 寛政改元ノコロ麴町ナル書肆江崎屋カ需ニヨリテコレヲ著スコノ書

行レス今知ルモノ稀ナリ

忠臣水滸傳十卷 安積沼五卷

近世奇迹考五卷 優曇花物語七卷

四季交加三卷

時世粧ノ繪入本ニ  
画ハ北尾重政ニ  
寛政中書肆仙雀  
堂梓行スコノ書  
イタク行レス鏡ニ  
五十部賣レタリト  
ソヨテ今甚稀ニ  
右京傳著述遺  
漏ニ下ハ書加ベシ

櫻姫曙草紙五卷 うごふ安方忠義傳六卷

不破名古屋 稻妻標紙五卷 本朝醉菩提十卷

浮牡丹全傳四卷 梅花冰裂三卷

雙蝶記六卷 骨董集四卷

骨董集中編遺稿一兩卷及抄録數十冊アリ友人

書肆ハ京山ニ就テ其遺稿ヲ刻セント請フ然レ

モ筆録錯乱シテ未タ編ヲナサス且其考索ノ全

カラサルヲ以果サス唯ムクノ、ノ小袖ノ考其他

一兩條全キモノアリ京山コレヲ家ニ刻レテ遺

墨ニ代テモテ諸友人ニ遺レリ



京傳遺財多ク有リト云 其外従才長等至某日遺財云云金アリ  
京山其嫂百合ト不協即チ遺財ヲ封シテコレヲ  
親戚中ニ預ラシム寡嫂百合空店ヲ成テ高賣故  
ノ如シ一日書肆甘泉堂百合ヲ訪フ百合泣テ云  
亡夫ノ在リシ日ハ倚ラ濡筆ヲ以風流及臨時ノ  
雜費ヲ補ヒシニ妾カ女流ナル加之親族ノ資少  
ナシ何以カ久クコノ店ヲ成ラム亡夫ノ在リシ  
日妾舅姑ノ称月毎ニ名字飯ヲ作りテコレヲ祭  
リ且近鄰及來訪ノ諸賢ヲ饗シキ然ルニ去年亡  
夫妻ニ謂テ云吾考妣ノ称月逮夜毎ニ汝カ料供

ヲ以コレヲ祭ルコト究メテ善シ然レニ其費ナ  
キニアラス今ヨリコレヲ省スハ吾カ身後モ祭  
ルコト亦復カクノ如クナルヘシ然レハ年中三  
度ノ称月アリ一称月ノ雜費九錢一貫文ハカリ  
ナルトキハ年中三貫文ノ費アリ汝カ舅姑ハ我  
ニ親ナリ吾今コレヲ制ルトキハ汝カ供養ニ怠  
レルニ非ス宜ク吾カ言ニ従フヘシト云レキ因  
テ去年ヨリ称月ノ供養ヲ廢シタリ今ニ至テコ  
レヲ思ヘハ亡夫ノ先見掌ヲ指スカ如シ妾今餘  
財ナシ且賣買ノウヘ損多クシテ利少シ縱ヒ三

稱月ノ供養セント欲スルトモ何ヲ以能センヤ  
言未タ訖ラス潜然トシテ哭泣ス甘泉堂聞テ埋  
アリト稱シ涙ヲ横タヘテ去リ又是ヨリ先馬琴  
百合ヲ訪フ百合唯舊時ヲ語テ家変ニ及ハス其  
明春又コレヲ訪フニ百合忙々トシテ出迎ヘ言  
語澹々乎トシテ狂女ノ如シ馬琴其氣ヲ察シテ  
速ニ去リ又是ヨリノ後復訪サリキ

文化十四年丁丑ノ春京山浅草寺ノ地中ニ京傳  
ノ机塚ヲ立タリ落成ノ日舊友ヲ塚辺ノ茶店ニ  
會シテ勅盃ノ義アリ皆亡兄ノ遺財ヲ以スト云

フ其記ニ曰

明和六年といふ頃の二月廿九日王齡九歳とい  
ふ師のかど子以里うちていろはふト習ひ  
めし時親のたまハ馬ふつく志を此法く志  
みまをけるさき法法くりざまのおろそり  
みまびくあらしを露あぐれぐのちふら一捨  
とく以このも一人みまかふりをはりていと  
り愛つあま庭しりハ五十子ちうく竹くれと  
つくれる冊子ハ百部をあらえた里今をわうこ  
いろをうしほほれしりまあこもうはみゆ

くまのいひしは是ゆぢろ記がち小うちゆが  
あどーくろおい子老志つらさまなふを  
いさひりせん

山東庵京傳

耳もそらあゆけくろりりり

世子ふりつくをあれも老うり

翁諱醒字酉星號醒齋又號山東庵稱傳藏以其所  
居近京橋一字京傳故其為京傳最著磐瀨氏其先  
出自磐瀨朝臣人上近世資詮者仕太田道灌為謀  
臣道灌七世隱於勢州一志祖信篤考信明仕某侯

多病辭仕隱於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少  
好釋史小說數百著作日富戲文幻說謬悠無根能  
令人悲能令人喜坊間書賈進於割剝者利市三倍  
於是兒童走卒莫不知京傳者晚悔少作無益於世  
改勵刻苦搜索奇秘著近世奇迹考及骨董集二百  
年來奇談逸事考據精確可以補小史矣文化十三  
年丙子九月七日沒歲五十六葬國豐山回向院第  
百樹埋翁幼時寫字業於淺草寺中枿本祠側以遺  
財建碑刻翁國字記使予記碑陰予識翁三十餘年  
名似放浪而實謹慎孝友天至過於所聞因題斯言

以告後之讀其書而不知其人者余

文化十四年丁丑春二月

江戸南畝覃撰

京山磐瀨百樹再書

或ノ云京傳ノ著述大小百十数部ノミ又其父ノ  
某侯ニ仕ヘシト云フコトハ吾所不知也一世ノ  
名家繼其祖ハ詳ナラズト云フ氏誰カコレヲ侮  
ラシヤ回向院ナル京傳ノ墓碑ハ京山ノ  
作文ナリ其文粗コレト相似タリ是年夏  
四月京山起行シテ伊勢及京撰ニ遊歴セリ秋九  
月其寡嫂百合画工豊國ニ亡夫京傳ノ肖像ヲ画  
シメテ則表装ス是月七日一周忌ニ當ルヲモテ

画像ヲ掲テコレヲ祭リ且亡父ノ舊友数人ヲ招  
テ饗膳ス百合言語譎々應答錯悞セリ來客皆嗟  
嘆ス至冬十一月京山伊勢ヨリ到レリ即親戚舊友  
ニ告テ云吾嫂病ニ因テ言語不平心神狂乱ノ如  
シ且去年來賣買ニ損アリ囊ヲ折クコト八十金  
ニ及ヘリ吾今嫡家ヲ續スハ亡兄ノ苦心画餅  
トナラム十二月ニ至テ京山其妻ト数子ヲ携テ  
京傳ノ家ニ移ル因テ物置キノ別室ヲ掃除シテ  
百合ヲコトニ安置セリコトニ於テ百合病ニ漸  
々ニ危シ日夜怨言シ且泣且罵テ已マヌ文化十

二月九日

法名  
京譽年應智傳

五年戊寅正月廿二日没シ又年四十許歳西國回  
 向院ナル京傳ノ墓ニ合葬ス識者云彼孀婦ノ憂  
 苦ニ依テ狂死セシハ先妻ヲ崇ナラム歎トイヘ  
 リ是年ノ春京山亡兄ノ遺財ヲ以其家ヲ造リ更  
 メ初秋ニ至テ落成ス因テ其兒筆吉ヲ改テ二世  
 傳藏トシ京山コレカ後見タリ賣藥ノ数ヲ増シ  
 テ七月廿六日開店セリ京山初ノ名ハ相四郎外  
 叔母鴛飼氏ノ養子タリシ時鴛飼助之進ト改ム  
 離縁ノ後書家東洲佐野文助ノ壻養子タリシ時  
 覽山佐野栄助ト改ム又離縁ノ後大吉屋利市ト

改タム竟ニ亡兄ノ遺跡ヲ相續シテ岩瀬百樹ト  
 称ス京山ハ其ノ号ナリ文政改元ノ冬書肆甘泉  
 堂仙鶴堂ト相謀リテ百合女追薦ノ為於回向院  
 大施餓鬼ヲ修行セリ其法會敢テ人ニ知ラセス  
 是ニ書買年来京傳ノ著編ヲ刊行シテ頗ル云贏餘  
 アリ今其徳義ヲ思モヘハナリ文化ノ間京山一  
 日山本北山ヲ訪ヘリ北山ノ云子ハ京傳ノ弟ニ  
 シテ京山ト号スルコト然ルヘカラス京京ハ憂  
 フル貌ナリ宜ク其号ヲ改タムヘシ然レトモ京  
 山タルコト既ニ世ニ知ラレタルヲ以不果ナ教年

後舍兄ノ憂ヒニカ、レリ豈偶然ナラム乎  
是編己卯冬十二月十二日起草至十五日三更  
卒業倉卒之際聊亦加校正辱此其稿本已唯以  
舉事實故不得曲筆飾文也自非趙氏之賢董狐  
之筆不能免矣宜秘藏者

伊波傳毛乃記

完

